

## 解答

一 問一 魔女のおしゃれが新鮮に見えた

問二 (1) 宿題も、本を読むのも、絵をかくのも、なにをするにも音楽を聞きながらやること。

(2) なんでも音楽を聞きながらやる様子が、少し軽々しくも危なっかしくも感じられ、それで身に付くのかと不安に思う反面、音楽にのって踊るような気分で作っていることをうらやましく思っている。

問三 秘密も、冒険も、どんな不思議なことでもいっぱい詰まっている、この世のどこにもない都会のような景色。

問四 ア はやる イ やい〔て〕 ウ こらし〔て〕 エ くぐる

オ しぼっ〔て〕 カ こらさ〔れて〕

問五 学校へ行きたくない私をなんとか学校へつれていこうとして、いろいろと工夫をこらし努力する父に対して、申し訳なく思い、父の期待にこたえて喜ばせたいと思ったから。

問六 か(蚊)〔のなくような〕

問七 イ

問八 主人公にふさわしい、絶対これではいけない、たった一つの名前を思いついたことで、ようやく物語を書きはじめられる状態になったということ。

問九 命〔名〕

問十 小学校一年生のとき、先生から「栄子ちゃん」と自分の名前を呼ばれたことに大喜びして自信を持つことができた経験から、名前の重要性を感じているために、物語中の人物にも、その人にふさわしい、絶対これではいけない、たった一つの名前を探してつけてやりたいという強い思いがあるから。

二 問一 「ふしぎ」を追究して、「わかった」という解決の体験をするか、自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から排除してしまうことで、平静をとり戻す。

問二 1 ウ 2 ア 3 オ 4 イ 5 エ

問三 納得したい

問四 (1) ① 「ふしぎ」を追究しようとせず、何でもわかったような気になっている点。

② 努力をしなくても必ず最後には解決できるような「ふしぎ」を求める点。

(2) ① 自分の力で、大変な努力をして「ふしぎ」を追究し、納得することができた点。

② 「ふしぎ」を追究した結果、人類に対する偉大な貢献として認められた点。

問五 家には売るほど米があるのだから米を食べればいいのに、なぜパンを食べるのだろうかとうふしぎに思っている。

問六 イ・ウ

問七 自分の答に、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちを込めたことで、その答が外的なだけでなく内的な「説明」となり、納得がいったから。

三 1 不可欠 2 典型 3 負傷 4 実績 5 登頂

6 腹心 7 成功 8 標的 9 織物

## 解説

一 出典は、角野栄子「ファンタジーが生まれるとき」。

問一 何を見て「面白そう」と思ったのかというと、「娘が描いた魔女の絵を見て」です。その絵の説明が傍線部の直後から始まっています。そして、その絵の印象をまとめたものが「魔女のおしゃれが新鮮に見えた」という部分になります。

問二 (1) 「ちやかちやかした芸当」とは何かという、傍線部の直前にあるように、娘が「宿題も、本を読むのも、絵をかくのも」「何をするにも音楽を聴きながら」やることです。

(2) (1)の内容を筆者がなぜ「ちやかちやかした芸当」と表現したかというのは、傍線部の一文をよく読めばわかります。まず、「宿題も、本を読むのも、絵をかくのも、それで身に付くのかと、わたしは不安にもなり」という気持ちの一つ、次に「わたしには全く無縁のこのちやかちやかした芸当が、ちよっぴりうらやましくもあった」というのが二つめの気持ちになります。

問三 「あんな景色のなかを私も魔女のように飛べる」の「あんな景色」とは、直前の「その風景は現実にあるニューヨークだというのに、この世のどこにもない都会のように感じられた。秘密も、冒険も、どんな不思議なことでも、いっぱい詰まっているように思えた」とあるのでこの部分をまとめます。

問四 ア：女の子の魔女の話を早く書くこうとしているので、「はやる」が入ります。 イ：学校に行こうとしない私にこずっている、手を「やく」↓「やい」が入ります。 ウ：父がいろいろ工夫をしようと考えているので「こらし」↓「こらし」が入ります。 エ：ここでは私がやっと学校に行くことを、校門を「くぐる」と言っています。

オ：ありったけの知恵を出すことを「知恵をしぼる」と言うので、「しぼっ」が入ります。カ：工夫されていたことを「趣向をこらす」と言い、ここでは受け身の形で「こらさ」れて、となります。

問五 傍線部に書かれている父の行動から、父の気持ちを読みとりましょう。「毎朝学校行きをぐずる私」を、父は「いろいろ工夫をこらして、なんとか学校につれていこうとし」ていますね。だからこそ、「私」は父に「すまない、申し訳ない」と思うと同時に、「期待にこたえて父を喜ばせたい」と思ったのです。

問六 「蚊の羽音のようなかすかな声」のことを「蚊の鳴くような声」と言います。ここでは、小学校の頃の筆者の小さな声のことですね。

問七 「今思うと、子どもの心ってこわいような不思議を抱えているものだ」とは、筆者の小学校の体験についての感想ですね。受け持ちの先生が「栄子ちゃん」と自分の名前を呼んでくれたことに、「先生はこんな情けない私の名前なんて知らないと思っていた」と、当時の筆者はおどろいています。それを、大人になって「こんな問題のある子の名前だったら先生は真っ先に覚えてしまうはずなのに。子どもって自分に自信が持てないと、だれからも自分は見えていないのだと思いきや、こわいのだ」と振り返っています。「こわいような不思議」とは、大人の想像をはるかにこえるような、子どもの「繊細さ・デリケートさ・傷つきやすさ」を表しているのです。

問八 傍線部のたとえを説明する問題です。「鍵がびたりとあつて」とは、「絶対これだけなければだめという、たった一つの（主人公の）名前」が決まった瞬間のことを言っています。そして、「扉がむこうにさっと開いた」とは、「や」とこの物語が書きはじめられる」ということを表しています。

問九 主人公に「キキ」と名前をつけているところですから、「名前をつけること」を表す「命(名)」が入ります。

問十 「名前が決まらないと、なにも書けない」理由は、傍線部⑦の前の段落に「こんな思い出があるせいかな、物語の中の人物の名前も、その人にふさわしいものをつけたい。絶対これだけなければだめという、たった一つの名前を探したいのだ。これにはそうとうこだわるとあるので、ここを中心にまとめます。そして、「こんな思い出」がきっかけとなっているので、筆者の小学校一年生の時の体験をつけたしましょう。

二 出典は、河合隼雄「物語とふしぎ」。

問一 「ふしぎ」という状態から、どのようにして「平静を取り戻す」のかというと、本文には、「『わかった』という解決の体験があつて平静に戻る」、「自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から排除してしまうことにより、心の平静を取り戻す」という二つの方法があることがわかります。

問二 ー：「あくまで（＝徹底的に）」ー「追究していきたくない」、2…：「ふと」ー「目を覚ますと」、3…：「とうとう」ー「起き出して」、4…：「せっかく」ー「平静を取り戻したのに」、5…：「まったく」ー「違うところ」と、それぞれつながっています。

問三 本文全体を読んで、「心に収める」という言葉が使われている部分と、似たような文脈で使われている言葉を探しましょう。本文では、ニュートンが「リングが木から落ちること」を追求して「万有引力の法則」を見つけたこと、釈迦牟尼が「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けて「仏教」を生んだことを、「心に収める」と言っています。また、本文の最後の部分に、「せみはなぜミンミン鳴いてばかりいるの」と聞く子どもに話があります。この話で「子どもは自分の答に『納得』した」という表現がありますね。子どもは、「ふしぎ」を自分なりに追求して、納得できる答を得たのです。先のニュートンと釈迦牟尼の例を振り返ると、両者はいずれも、「ふしぎ」を追求して自分が納得する答を見つけたという例だとわかります。したがって、「納得したい」が正解です。

問四 (1) 「テレビ番組や催しものなどを見る」人と、「ニュートン」「釈迦牟尼」「こんな人」とが違う点は、Aの一文に「何もかもわかったような気になるとしてテレビ番組や催しものなどを見る」、そして、次の一文に「これらは必ず『ふしぎ』なことが最後には心に収まるようになっているので安心」とあるので、この二か所をうまく分けて説明します。

(2) 「ニュートン」「釈迦牟尼」が「テレビ番組や催しものなどを見る」人や「こんな人」と違う点は、「ニュートン」の説明部分に「大変な努力が必要だった。そして、彼の努力は人類全体に対する大きい貢献として認められた」とあり、同じ内容が「釈迦牟尼」の説明部分にも同様にあります。この部分を二つに分けて説明しましょう。

問五 「おとうさんは／こめややのに／あさ パンをたべる」と書いたまさひろくんの気持ちを考えます。米屋で米がたくさんあるのだから米を食べればいいのに、なぜわざわざパンを食べるのかと、子どもなりに「ふしぎ」に思っているのでしょうか。

問六 本文中の「大人にとってあたりまえのことは、子どもにとってすべて『ふしぎ』と言っているほどである」から、ウが選べます。また、「大人に答を聞いたり、自分なりに考えたりして、子どもは、自分の知識を貯え、人生観を築いていく」、「子どもは『ふしぎ』と思うことに対して、大人から教えてもらうことによって知識を吸収していく」から、イが選べます。

問七 傍線部の後に理由説明があります。「これは、子どもが自分で『説明』を考えたのだろうか。それは単なる外的な『説明』だけではなく、何かあると『お母さん』と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなからうか。だからこそ、子どもは自分の答に『納得』したのではなからうか。」とあるので、この「だからこそ」の前を使ってまとめればいいのです。答えに自分の気持ちを込める、つまり、内的な「説明」ができたからです。